

〈特集：キューバ革命50周年／日本キューバ国交樹立80周年記念〉

グローバル化対ローカル・エンパワメント

原 田 金一郎

はじめに

いまや世界の耳目は、アメリカ発祥の「世界金融危機」に集中している。たしかにこの危機は、百年に一度というほどの世界同時不況を生み出し、中心部のみならず周辺部をも巻き込んで、その影響は測り知れないほどである。日本でも、トヨタやキャノンといった世界的なメガ企業が、赤字転落や人員整理に追い込まれている、しかし、他方では、派遣社員とかホームレスといった、いわば先進国日本の「周辺部民衆」は、底辺庶民としての苦渋をなめていることを忘れてはならないであろう。

一方、私が専門としているラテンアメリカにおいては、左翼・中道左派政権が台頭してきており、もはや「われわれはアメリカの裏庭などではない」と異議申し立てを宣言している。従来政策のベースとなってきた新自由主義（新古典派理論）は凋落し、たとえば、教育と医療の無償化を実現した共産主義キューバを先頭にし、ベネズエラのチャベス政権は「21世紀の社会主義」を宣言し、国内民衆と議論を積み重ねている。ボリビアでは、先住民大統領が誕生し、おなじく反米の姿勢をとっている。

私が1999年以来フィールドワークを行ってきた、ペルーのビジャ・エルサルバドル市では、1971年スラムとして発足したが、1984年市として制定され、スラム共同体から市民共同体へと進化を遂げ、参加的民主主義を実行している。たとえば、地区住民が市の予算の審議に参加し、その実行にも参加している。このような参加型予算に象徴される同市は、周辺部の地域共同体のひとつの道の先駆者的な存在であるといっていよう。

つまり、周辺部は、単に受動的にグローバル化に巻き込まれているのではなく、いわば「ローカル・エンパワメント」とでも呼ぶべき、自立と共生の道を歩んでいるのである。

(1) ラテンアメリカ周辺部—従属から自立へ

かつてラテンアメリカは、米国の「裏庭」と呼ばれた。ひどいことに、レーガン大統領などは、もはやラテンアメリカは裏庭などではなく、「表庭」であるとその演説で述べたことがある。ラテンアメリカ諸国の国家主権に対する敬意などまるでない言辞が、平気で使われるほどラテンアメリカは米国に従属していたのである。多くの自立を目指す政権が、ことごとく米国の干渉（軍事的手段、非軍事的手段を問わず）により崩壊させられた。唯一の例外が、今年革命勝利50周年を迎えたキューバであった。キューバは、1991年のソ連・東欧の「共産主義体制」崩壊による援助ストップにも耐えた。そして、途上国でありながら、教育・医療の無償化を維持している。

フィデル・カストロにつづく指導者は、ベネズエラのウーゴ・チャベス大統領である。『21世紀の社会主義』を標榜し、国民レベルでの対話を展開している。憲法も改正し国名を「ベネズエラ・ボリバル共和国」と改めた〔佐藤，2007〕。

つぎにラディカルなのはボリビアのモラレス大統領である。新憲法においては、女権の拡張がうたわれ、先住民出身の初の大統領として活動している [Hedly, 2009]。

米国がおしつけた新自由主義の最大の犠牲者は、おそらく、自国通貨を剥奪されたアルゼンチンとエクアドルであろう。このドル化（ドリライゼーション）によって両国は、民族の誇りも国家主権までも失った。これら諸国はチャベスが提唱している南米共同市場（アルバ）計画に賛同している。

おなじく、別の [9・11] を 1973 年ピノチェットのクー・デターで経験したチリは、女性大統領であるが故アジェンダが率いた社会党出身の女性大統領がチャベスのリーダーシップに追随している。

ラテンアメリカはいまや米国に対し反乱する周辺部となっており、この他にも、左派政権としては、中米のニカラグアがあり、サンディニスタ民族解放戦線（FSLN）が、1990 年選挙に敗北してから 10 年間、第 1 野党として国民の理解をえるまでに活動し大統領選挙に勝利した。

この他にもウルグアイも左派政権だと聞いているし、ペルーのアラン・ガルシア政権も本来は中道左派政権であるが、ペルーでは「左翼」で通っている。

ラテンアメリカはいまや米国に対し反乱する周辺部となっている。ただし、現在では対米従属路線をとっている。というのも 1998 年東アジア通貨危機がペルーにおよんでいらい、ペルー経済は沈滞したままだからだ。

域内の大国メキシコは中道政権であるが、NAFTA の利益が、米国へ一方的に流れていると不満の声を上げている。

他方南の域内大国をめざすブラジルのルラ政権は中道左派で、ベネズエラのイニシアチブについてこうとしている。MERCOSUR（南米南部共同市場）と名目だけになっているアンデス共同市場を合併させることを目指す、新たな南米共同市場（UNASUR）はけっして現実味のないものではない [伊藤, 2007]。

(2) 地域共同体の再生—ローカル・エンパワメント

次に紹介したいのは、地域が権力を持ちつつあるということである。地方分権化はラテンアメリカにおいても進みつつある。私が例示したいのはペルーのビジャ・エルサルバドルである。

1971 年 5 月ペルーの首都リマの郊外パンプロナでひとつの「土地侵入」がおこった。300 家族とも 400 家族ともいわれるスラム民衆が公有地に侵入し、小屋を建てた。翌日警官隊との衝突がおこり、1 人の犠牲者をだした。ときの政権ベラスコは革命的軍事政権を標榜しており、壮大なブレインカ遺跡のパチャカマに隣接する砂地を代替地として与えた。ここに集結した貧民は 7 万人といわれている。そして人々はみずからのスラムを [救世主の町] ビジャ・エルサルバドル Villa El Salvador と名づけた。

ひとりの貧民は無力であるが、連帯すればパワーとなる。ビジャの住民は政府への行進やデモによって、水道、電気、下水などを獲得した。1973 年人々はみずからをビジャ・エルサルバドル自主管理都市共同体（CUAVES）と名づけた。都市を自主管理社会主義のもとで管理しようという初の試みであった。

まず地区委員会（24 世帯）を組織し、5 人の代議員を選出し居住集団を結成し、そこから 8 人の代議員を選出し、代議員総会を結成する。これが最高決定機関である。1970 年代の代議員総会

は 400 名からなっていた。

当時のビジャの人口は約 12 万人、住民の職業構成は、職人および労働者 37%、商人 33%、左官 20%、サービス業 7%、農牧業 3%であった。

1984 年ビジャにとって大きな変化が生じる。市への制定がそれである。初代市長であるアスクエタ (Michel Azcueta) は、1982 年の演説において、自主管理社会主義は資本主義の海のなかの [島] ではありえない、と批判し、CUAVES 衰退の理由として次の 4 点を挙げた。

- 1) 1975 年以降のペルーの経済危機
- 2) ベルムデス政権 (1975 - 80 年) による恒常的抑圧
- 3) 選挙のための政治的キャンペーン隣人組織にダメージを与えたこと
- 4) 共同体執行審議会 (CEC) とりわけロハス (Apolinario Rojas, CUAVES の初期のリーダーの 1 人) の反民主的行為

これに対し CUAVES はこう反論している。「CUAVES と市当局は 2 つの異なる組織であって、とりかえたり除去されることはない。しかしながら、CUAVES はビジャ・エルサルバドルの民衆の防衛と闘争の自治的機関である [Coronado, 1996, p. 60]。

さらに CUAVES は批判する。「市とは、ゴミ、排水、講演や道路の問題に対処するために、もろもろの税をつうじて住民から経済資源を流出させる資本制国家の地方行政機関である」[ibid.]。

しかし、現実においては、国家の資本と技術の支援をうけている市当局 (のちに地方政府と改名) が地方権力の中核となった。そのきっかけは 1987 年設立されたビジャ・エルサルバドル工業団地である。政府は 28 の工業団地計画を予定していたが、成功したのはビジャ・エルサルバドルだけであった。2000 年現在 1200 の企業と 2 万人の従業員を抱えるまで発展した。

地方政府の政策も、かつての自主管理共同体の影響をのこしており、参加型予算という政策をとっている。これは地域住民が市の予算の議論に参加し、その実行にも参加するというものである。かれらは、参加的民主主義とこれと呼んでいる。いまや人口 40 万人の近郊都市にビジャ・エルサルバドルは生まれ変わったのである。私はこれを、スラム共同体から市民共同体への発展と呼びたいと考えている。

むすびにかえて

21 世紀は変革の世紀である。それは、グローバル・レベルでも、ナショナル・レベルにおいても、ローカル・レベルにおいてもいえることである。本稿においては、これらについて管見の限りであるが自論をのべた。読者諸賢の忌憚ないご批判を仰ぎたい。

参考文献

伊藤千尋

2007 『反米大陸—中南米がアメリカにつきつける NO!』, 集英社。

佐藤美由紀 (監修)

2007 『ベネズエラ・ボリバル共和国憲法』。

原 田 金一郎

新藤通弘

2006 『革命のベネズエラ紀行』, 新日本出版社。

チャベス, ウーゴ, アレイダ・ゲバラ

2006 『チャベス：ラテンアメリカは世界を変える!』, 作品社。

原田金一郎

2004 「ピジャ・エルサルバドル地方政府—自主管理社会主義から参加的民主主義へ」, 大阪経済法科大学『経済学論集』, 27 卷 3 号。

Hedly, Kevin "Benito"

2009 "Las mujeres y la nueva constitución boliviana", *Desarrollo de Base*, vol. 30, no. 1.

Coronado, Jaime, Ramón Pajuelo

1996 *Villa El Salvador : Poder y comunidad*, CECOSAM-CEIS, Lima.